

# 加茂

禪竹作

季は	地は	後	前
六月	山城	ワキ 前に同じ	ワキ 室明神の神職
		ツレ (天女) シテ 別雷神	シテ 里女 侍女

「清き水上尋ねてや。／＼。加茂の宮居に参らん。

詞

「抑是は播州室の明神に仕へ申す神職の者なり。さて  
ても都の加茂と当社室の明神とは御一体にて御座候  
へども。いまだ参詣申さず候ふ程に。此度思ひ立ち  
ち都の加茂へと急ぎ候。

道行  
「播磨潟。室の局の曙に。／＼。立つ旅衣色染むる。  
飾磨の徒路行く舟も。上る雲井や久堅の。月の都  
の山陰の。加茂の宮居に着きにけり。／＼。

シテ、ツレ一声  
「御手洗や。清き心に澄む水の。加茂の河原に出づ  
るなり。

ツレ  
「直に頼まば人の世も。

二人  
「神ぞ糺の道ならん。

シテサシ  
「半ゆく空水無月の影更けて。秋程もなき御祓川。

二人  
「風も涼しき夕波に。心も澄める水桶の。もちがほ  
ならぬ身にしあれど。命の程は千早振。神に歩を  
運ぶ身の。宮居曇らぬ心かな。

下歌

「頼む誓は此神に。 よるべの水を汲まうよ。

上歌

「御手洗の。 声も涼しき夏陰や。 く。 累の杜の梢

より。 初音ふり行く時鳥。 なほ過ぎがてに行きやらで。 今一通り村雨の。 雲もかげろふ夕づく日。 夏なき水の河隈。 汲まざとも陰は疎からじ。 く。  
ワキ詞  
シテ詞  
「如何に是なる水汲む女性に尋ね申すべき事の候。  
「是は此あたりにては見馴れ申さぬ御事なり。 何処よりの御参詣にて候ふぞ。

ワキ  
「実によく御覧じ候ふ物かな。 是は播州室の明神の神職の者にて候ふが。 始めて当社に参りて候。 先々是なる河辺を見れば。 新しく壇を築き。 白木綿に白羽の矢立て。 剥へ渴仰の氣色見えたり。 こはそもそも何と申したる事にて候ふぞ。

シテ  
「さては室の明神よりの御参詣にて候ふぞや。 また是なる御矢は。 当社の御神体とも御神物とも。 唯此御矢の御事なり。 あからさまなる御事なりと

も。渴仰申させ給ひ候へ。

ワキ「實に有難き御事かな。さて／＼当社の神秘に於て。  
さまぐ有るべき其内に。

詞「分きて此矢の御謂。委しく語り給ふべし。

シテ詞「總じて神の御事を。あざ／＼しくは申さねども。  
あら／＼一義を顯はすべし。むかし此加茂の里に。

秦の氏女と云ひし人。朝な夕な此河辺に出でゝ水  
を汲み神に手向けゝるに。ある時河上より白羽の  
矢ひとつ流れ來り。此水桶にとまりしを。取りて  
帰り葦の軒に挿す。主思はず懷胎し男子を生めり。  
此子三歳と申しゝ時。人々円居して父はと問へば。  
此矢をさして向ひしに。此矢すなはち鳴雷となり。  
天に上り神となる。別雷の神是なり。

ツレ「其母御子も神となりて。加茂三所の神所とかや。

シテ「左様に申せば憚りの。誠の神秘は愚なる。

シテツレ「身に弁へは如何にとも。いさ白真弓弥猛の人の。

治めん御代を告げ白羽の。八百万代の末までも。  
弓筆に残す心なり。

ワキ 「よくく聞けば有難や。さてく其矢は上る代の。  
今末の世にあたらぬ矢までも。御神体なる謂は如何に。

シテ 「実によく不審し給へども。隔てはあらじ何事も。

ワキ 「心からにて澄むも濁るも。

シテ 「同じ流れのさまぐに。

ワキ 「鴨の河瀬も変はる名の。

シテ 「下は白川。

ワキ 「上は鴨川。

シテ 「又其内にも。

ワキ 「変はる名の。

地 「石川や。瀬見の小河の清ければ。く。月も流れ  
を尋ねてぞ。澄むも濁るも同じ江の。浅からぬ心  
もて。何疑ひの有るべき。年の矢の。早くも過ぐ

る光陰。惜しみても帰らぬはもとの水。流れはよ  
も尽きじ。絶えせぬぞ手向なりける。いざく水  
を汲まうよ。く。

ロンギ地  
「汲むや心もいさぎよき。鴨の河瀬の水上は。如何  
なる所なるらん。

シテ「何処とか。岩根松が根凌ぎ来る。滝つ流れは白玉  
の。音ある水や貴船川。

地「水も無く見えし大井川。それは紅葉の雨と降る。

シテ「嵐の底の戸無瀬なる。波も名にや流るらん。

地「清滝川の水汲まば。高嶺の深雪解けぬべき。

シテ「朝日待ち居て汲まうよ。

地「汲まぬ音羽の滝波は。

シテ「受けて頭の雪とのみ。

地「戴く桶も。

シテ「身の上と。

地「誰も知れ老いらくの。暮るゝも同じ程なさ。今日

の日も夢の現ぞと。うつろふ影は有りながら。濁りなくぞ水むすぶの。神の心汲まうよ。神の御心汲まうよ。

ワキ詞

「實に有難き御事かな。かやうに委しく語り給ふ。御身は如何なる人やらん。

シテ詞  
「誰とは今は愚なり。汝知らずや神慮に趣き。迎へ給はゞ君を守りの。此神徳を告げ知らしめんと。顕はれ出でゝ。

地  
「恥かしや我姿。恥かしや我姿の。真をあらはさばあさましやな。あさまにやなりなん。よし名ばかりは白真弓の。やごとなき神ぞかしと。木綿四手に立ちまぎれて。神がくれになりにけりや。神がくれになりにけり。(中入)

天女  
「あら有難の折からやな。我此宮居に地をしめて。法界無縁の衆生をだに。一子とおぼし見そなはす。御祖の神徳仰ぐべしやな。雲らぬ御代を守るなり。

地 「守るべし守るべしやな。君の恵も今此時。

天女 「時至るなり時至る。

地 「感應あらば影向微妙の。相好莊嚴まのあたりに。  
有難や。 (天女舞)

地 「賀茂の山並御手洗の影。く。移りうつろふ緑の  
袖を。水に浸して涼みとる。く。裳裾をうるほ  
す折からに。山河草木動搖して。まのあたりなる  
別雷の。神体来現し給へり。

後ジテ  
「我は是れ。王城を守る君臣の道。別雷の神なり。

地 「或は諸天善神となつて。虚空に飛行し。

シテ  
「又は国土を垂跡の方便。

地 「和光同塵結縁の姿。あら有難の御事やな。

シテ  
「風雨隨時の御空の雲井。

地 「風雨隨時の御空の雲井。

シテ  
「別雷の雲霧を穿ち。

地 「光り稻妻の稻葉の露にも。

シテ  
「宿る程だに鳴雷の。

地  
「雨を起して降りくる足音は。

シテ  
「ほろく。

地  
「ほろく。とゞろくと踏みとゞろかす。鳴神の  
鼓の時も至れば。五穀成就も国土を守護し。治ま  
る時には此神徳と。威光を顯はしおはしまして。  
御祖の神は糺の森に。飛び去りく入らせ給へば。  
猶立ち添ふや雲霧を。別雷の。神も天路に攀ぢ上  
り。神も天路に攀ぢ上つて。虚空に上らせ給ひけ  
り。